

学習相談室の立ち上げ

センター協力研究員（草加市立松江中学校校長） 鐺 木 良 夫

本プロジェクトに参加させていただき、感謝している。それは、学力低下に関する識見を持つ機会をいただいたからだ。私は、中学校を預かる身として、どうやれば学力低下への不安を払拭できるかという問いを持ち続けて参加した。

1 水曜は4時間授業

私が勤務する中学校では、2001年10月から学習相談室を開設した。毎週水曜日午後2時から3時30分までの1時間30分を学習相談の時間とした。この間は部活動を禁止し、学習相談室参加の便を図った。

学習相談室を開設するにあたり、週1回4時間授業を設定する教育課程の編成が不可欠である。水曜日を土曜半ドンにして、放課後に開設しようという案であり、週休日の土曜に実施などということは考えなかった。土日は学校から解放させたいと思うからである。

しかし、ことは簡単に進まなかった。水曜4時間授業の実施は、ささやかながらもいくつかの改革を促さざるを得なかったからだ。例えば、週1回部活を休むことへ努力、ノーチャイムの実施等々……。これらの改革には心理的な抵抗があった。何か古き良き学校の雰囲気壊れてしまうのではないかというノスタルジアのような感覚である。保護者からも抵抗があった。

また、せっかく放課後が浮いたのだから自由に過ごさせたいという気持ちもあった。今の中学生には、暇がない。友だちと話し込んだりする時間もなく追われている。それは、休み時間10分長くただで楽しく遊ぶ姿が見られたことから分かることだった。こんな姿を見ると、せっかくの放課後だから遊ばせたいと思うのも教師心である。

それやこれやで、学習相談室の参加は子どもの判断に任せることになった。

2 190名の参加

参加を自由としたので、何人来るか心配した。

半年で19回の開催、延べ190名の参加があった。正直なところほっとした。しかし、参加する機会を作ったということだけに目が向いたこの1年であり、課題は満載である。

さて、参加自由ということは何を勉強するかも自由であった。教科でいうと数学、英語、理科、国語、社会の順となった。また、学習のほとんどは復習がほとんどで全体の87%であり、その内容は、学校で指定した問題集、教科書を使っての復習が多かった。これは、授業が時間ぎりぎりで行われている実態を示している。学習を確実なものにするには、やはり家庭で復習をすることは必然の状況となっている。それにしても、窓の外に目を転じれば校庭でサッカーやバスケットに興じる同級生の姿があり、それに構わず学習している姿はいじらしいほどであった。

3 保護者も支援に参加

各学年から1名ずつの3名の教師と毎回3名前後の保護者が学習支援にあたった。求めに応じて一緒に解こうというスタンスを保った。

予想外の良い姿として、例えば英語の教師が国語の問題を生徒や保護者と共に解く姿があった。音楽の教師が英語を教えている姿も見られた。これは、相談室での学びを気楽なものにした。保護者の学習支援ボランティアも最初は構えていたが、回を追うごとに自然体で子どもに接するようになった。

4 2002年度も継続

学習相談室の開設が学力低下に歯止めが効くかどうか分からない。しかし、このような地道な努力が学校現場では必要なのだということを実感した2001年度後半であった。

開設しただけでも理解された学習相談室の課題は、効果的な学習相談室の運営である。